

後立山連峰(富山県)

ジャピック

財団法人 日本医薬情報センター(JAPIC) 2010 / No.316

JAPIC NEWS

CONTENTS

■巻頭言

「変化の分岐点」

ファイザー株式会社 取締役 執行役員 エスタブリッシュ製品事業部門長 松森 浩士 2

■インフォメーション

8月発売!「添付文書記載病名集 Ver.3.0-医薬品の効能効果と対応標準病名-」..... 4

9月1日発刊!「JAPIC一般用医薬品集2011」..... 4

「JAPIC医療用医薬品集2011」更新情報メールサービス(無料)申込み開始 4

7月末に発行しました!

書籍「JAPIC医療用医薬品集2011」検食用CD-ROM付 5

CD-ROM「JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版2010年7月版」..... 5

CD-ROM「JAPIC OTC医薬品CD-ROM 2010年7月版」..... 5

■トピックス

JAPICサービスの紹介「医薬品と対応病名」..... 6

「JAPIC AERSサービス説明会」を終えて 8

「第134回薬事研究会」を開催しました..... 8

「理事会」「評議員会」の概要報告..... 9

■コラム

薬剤師の現場「臨床の現場以外の薬剤師として私が出来ること」

(社)兵庫県薬剤師会 薬事情報センター 簀下 圭子 10

会員の声「感謝をこめて」

日本ケミファ株式会社 安全管理部長 兼 くすり相談室長 千葉 昌人 12

くすりの散歩道 No.38 「納豆-医薬品のようなサプリメントのような伝統食-」

(財)日本医薬情報センター 添付文書情報担当 小林 映美 13

外国政府等の医薬品・医療機器等の安全性に関する規制措置情報より-(抜粋)..... 14

■図書館だよりNo.242 ■情報提供一覧 15

変化の分岐点

ファイザー株式会社 取締役 執行役員
 エスタブリッシュ製品事業部門長
 JAPIC評議員 松森 浩士 (Matsumori Hiroshi)



10年前、アップルの市場価値はソニーの1/30以下で比較にならない存在でした。ところがアップルはiPhoneなどの革新的な製品を次々に導入し飛ぶ鳥を落とす勢いで。今では市場価値は完全に逆転しアップルはソニーの8倍になりました。ソニーはこれまでPC、携帯電話、携帯音楽機器、ゲーム機器、映像音楽配信など別々の事業部制を取りそれぞれトップクラスの製品を持っていました。iPhoneのような機種を作り出す技術もきっとあったので、それを活かすことができなかつたのだと思います。今までのビジネスの仕組みに固執するあまり、ビジネスのルール自体が変わってしまうような変化点を見失ってしまった例なのかもしれません。

このように、大企業においては安定を志向するあまり Dominant logicつまり既成概念の殻に閉じこもる傾向があり、世の中に現れ始めている Inflection pointsつまり変化の分岐点を見過ごしてしまうことがあります。このような事例の勝者の多くは、その時に戦っていた競合の大企業でなく、アップルのような起業家精神に富んだ柔軟で意思決定の早い会社です。

エレクトロニクスの業界では技術革新が勝敗を分けることが多いと思いますが、これを医薬品業界に当てはめるとどうでしょう。医薬品業界は規制産業で、急激な変化は起き難いと思いますが、それでも多くの変化が起きています。たとえば、大型製品中心のブロックバスタービ

ジネスモデルは後継新薬（低分子）の枯渇化とともに終焉を迎えつつあります。一方、以前は難しかったバイオ医薬品の開発も最近では科学の進歩とともに創薬の中心になりつつあります。後発医薬品も政府の医療費抑制策強化により急成長し新薬メーカーにとって大きな脅威となっています。かつて優勢を示していた先進国マーケットもその成長が鈍化し、代わって新興国マーケットが急成長しています。いずれも今では顕著な変化ですが、ここ10年の間にその兆候が現れ、変化の分岐点を過ぎたものと思われます。このような環境を客観的に眺めると、今の製薬産業がおかれている状況は、歴史に残る大きな変換点にあると思われ、正にパラダイムシフトが起きているといっても過言ではありません。

先のアップルの例で言えば、変化が顕著になる前にその分岐点を見極めて、いかに迅速に対応するかが成功の鍵となります。このような状況で自分の会社がどのように対応していくか気にかかるころですが、私が働いているファイザーは、積極的に会社を取巻く様々な変化の対応に取り組んでいます。私には10年前のソニーと数年前のファイザーの状況とが重なって見えます。

ファイザーはノルバスク、リピトールなどの循環器系薬剤の成功を契機にブロックバスタービジネスモデルで突き進んできました。その過程で2000年にはワーナーランバート、2003年にはファルマシアと合併し規模を拡大して

きました。その結果、組織は肥大化し、いわゆるセクショナルリズムが強まるサイロ化現象、CEOから末端の社員まで多くの階層があり、これが官僚的プロセスを助長し、その結果意思決定が遅くなるという問題がありました。

私が、ファイザーが本当に変わろうとしていると感じたのは、2006年にジェフリー・B・キンドラーがCEOに就いたことです。今までの生え抜きのCEOとは異なり、弁護士であり異業種（マクドナルド）に籍をおいていた彼は就任以来第三者の目で、ブロックバスターモデルからの脱却のための多くの改革を実行してきました。

キンドラーは肥大化した組織をスリム化する一方で、2008年には新しい概念のビジネスユニット制を導入しました。その狙いはグローバル企業の規模とリソースを維持しながら小規模な企業のスピードと機動力を活かし、顧客の多様なニーズをより効果的に予測し対応できる組織を作り、役割責任をより明確にする事でした。

もうひとつの打ち手は昨年（2017年）のワイス社との合併（日本では今年6月）。これによりワイス社が得意とするワクチン、生物学的製剤、癌領域の新薬パイプラインを強固にしました。さらに、栄養剤、OTCなどのビジネスを取り込むことで、今まで製薬ビジネスに選択と集中を強めていた方針を一転させ、よりリスクを分散させるために多角化を一段と強化しました。

医薬品分野の5つのビジネスユニット制でユニークなのは、単純に疾患領域を軸にせず、それぞれ異なる切り口でビジネスユニットを設けたことです。「プライマリー・ケア」「スペシャリティ・ケア」「オンコロジー」はそれぞれ患者さんの対象が異なりますが新薬を中心とした事業部門です。その後、特許切れなど独占権喪失後（LOE後）のすべての製品は「エスタブリッシュ製品（医薬品）」ビジネスユニットで扱うこととなります。これに加えて市場の成熟度、地理的な観点から「新興国」ビジネスユニットがあります。

5つのビジネスユニットの中でも私が驚いたのが「エスタブリッシュ製品（医薬品）」ビジネスユニットです。そしてまさか私がこのビジネスを担当することになるとは思いませんでした。このビジネスユニットでは自社の長期

収載品に加えて後発品も扱うこととなります。今までのファイザーにとって後発品は競合上敵視する存在でしたが、発想をまったく変え後発品を自社ブランドの新製品として売り出すことで価値を上げ、今まで失っていただけた独占権消失後のビジネスを成長エンジンにしようという新しい発想のビジネスモデルです。このような考えは新薬メーカーとしてプライドを誇っていた今までのファイザーではありえないものでした。しかし、考えてみれば新薬で得られる利益も、後発品で得られる利益も、これから益々お金のかかる新薬の開発に再投資するという意味では価値はまったく同じです。

エスタブリッシュ製品事業部を日本で立ち上げてからもう直ぐ一年になります。この間、今まで新薬を中心に物事を考えてきた私にとって実に多くのことに気づかされました。特許が切れた医薬品の呼称にはネガティブなイメージが先行します。先発メーカーの薬は「長期収載品」、他社が発売すると「後発品（ジェネリック）」ですが、業界の俗語で「ゾロ」という表現もしばしば耳にします。しかし、考えてみると化合物そのものは、長い間医療現場で使用された実績に基づき、効果と安全性の評価がすでに確立されており、良い薬として大切に使われている薬です。私は「エスタブリッシュ医薬品」すなわち「長く使われている標準的治療薬」という呼称と概念を普及させることでそのイメージをポジティブに変えていきたいと考えています。

「エスタブリッシュ医薬品」は、標準的治療薬として多くの患者さんに使われています。また価格においても長期収載品の多くは5回以上のマイナス薬価改定を経て初期薬価の半分以下の値段になっていますし、後発品は更に安価です。高齢化などで今後増大する医療費のことを考えるとエスタブリッシュ医薬品は益々重要になると思われます。これからは「特許で守られた新薬」と「エスタブリッシュ医薬品」という二つの大きな軸で医薬品市場を考えていくべきだと考えます。変化の分岐点を読み込んだこの新しい「エスタブリッシュ医薬品」というコンセプトが、日本の医療を変えていくことを夢見ています。

8月発売！「添付文書記載病名集 Ver.3.0－医薬品の効能効果と対応標準病名－」

今回のVer.3.0では、ICD10コードの上2桁が一致している病名、病名の一部が一致するものを候補病名として抽出し、対応標準病名を更に充実させました。前版までと同様に複数の専門医師及び薬剤師によって評価を行いました。

《収載内容》

- ◇2010年4月までにJAPICで入手した添付文書、及び2010年5月薬価収載の後発品
- ◇付録として2010年6月薬価収載の新薬
- ◇2010年4月時点での薬価
- ◇ICD10対応標準病名マスター：Ver.2.90（MEDIS-DC提供、2010年6月更新情報）
- ◇厚生労働省保険局医療課長通知「医薬品の適応外使用に係る保険診療上の取扱いについて」（保医発第0921001号）による内容

《価格》 ¥7,770（税込）

9月1日発刊！「JAPIC一般用医薬品集2011」

来る9月1日に「JAPIC一般用医薬品集2011」を発刊します。改正薬事法により、販売制度が大きく改められた一般用医薬品。リスク区分を各製品について掲載するなど、改正薬事法に対応した一冊です。

《JAPIC一般用医薬品集2011の特長》

- ◇国内流通の一般用医薬品、約12,000製品を収録（2010年7月までの一般用医薬品情報を収録）
- ◇最新の添付文書を日本製薬団体連合会の委託を受け収集。国内流通の一般用医薬品をほぼ全て網羅
- ◇各製品の組成・効能効果・用法用量を掲載すると共に、薬効ごとの「使用上の注意記載要領」を記載し、更に新一般用医薬品などの「使用上の注意」を収録して添付文書記載内容を網羅するよう編集
- ◇一般用医薬品販売に必須情報である、医薬品製品ごとのリスク区分を本文（製品説明部分）及び50音索引に掲載。探している医薬品のリスク区分がすぐ判る第一類医薬品のみを集めた索引に製造販売会社などの情報を付加した第一類医薬品索引を収録
- ◇付録：一般用医薬品のリスク区分一覧（成分）・ブランド名別成分比較表を収録

《価格》 ¥9,450（税込）

「JAPIC医療用医薬品集2011」更新情報メールサービス（無料）申込み開始

《特長》

本サービスは、「JAPIC医療用医薬品集2011」をご購読の皆様を対象とし、JAPICで入手した添付文書のうち、【効能効果】、【用法用量】、【警告】、【禁忌】、【重大な副作用】などの重要な改訂について、毎月お知らせするものです。また、薬価収載など承認事項に関連した情報も、可能な限りご提供しております。

ご登録いただいたメールアドレスに、更新情報を公開しているサービスサイトのURLを毎月（計10回）送信いたします。サービスサイトでは、項目表題ごとの更新情報をPDFファイル形式で公開しており、更新履歴もご覧いただけます。

〔提供内容は新規成分・重要な改訂を網羅した更新情報シール（有料）と同一です。〕

《お申込み方法》

登録フォーム（URL：<https://www.japic.or.jp/iryuu2011.html>）より必要事項を入力し、お申込みください。本サービスのご案内は、表記医薬品集巻末の綴じ込みはがきにも掲載されておりますので、ご参照ください。

《お問合せ先》 事務局 業務・渉外担当（TEL：0120-181-276）

7月末に発行しました!

(1) 書籍「JAPIC医療用医薬品集2011」検索用CD-ROM付

本書は、5月の後発品収載に対応しています。

《特長》

- ◇2010年6月薬価基準収載分までの医療用医薬品を網羅(約18,000製品)
- ◇医療用医薬品添付文書情報を有効成分(約2,100成分)ごとにまとめて掲載
1,300成分については「構造式」も掲載
- ◇先発品(またはそれに準ずると思われる医薬品)と後発品及び局方品が明確に区別できるように記載
- ◇同一成分内での剤形の違い・製品の違いにより効能・効果が異なる場合はその違いを明記
- ◇医療用医薬品添付文書情報・一般用医薬品添付文書情報・医療用医薬品識別コード情報を収録し、最新医療用医薬品添付文書への[リンク機能](#)*を搭載した検索用CD-ROM(非インストール版)を添付
*インターネットを経由してJAPICが運営するiyakuSearch掲載の添付文書PDFを表示

《価格》

- ◇¥13,650(税込)
- ◇検索用CD-ROM(非インストール版)単品での販売もごさいます。¥8,000(税込)

(2) CD-ROM「JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版2010年7月版」

《特長》

- ◇医療用及び一般用医薬品の添付文書情報を収録したWindows対応CD-ROM
(2010年6月までのJAPIC入手分に基づく)
- ◇医薬品データの検索・閲覧・印刷・テキスト出力が可能
- ◇院内採用医薬品の登録・データ編集・出力が可能。院内医薬品集の作成を補助

《価格》

- ◇単品で¥15,000(税込)。年間セット4枚(7月・10月・1月・4月)で¥25,000(税込)
“JAPIC医療用医薬品集2011検索用CD-ROM付”及び“JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版2010年7月版”のお得なセット販売もごさいます。

(3) CD-ROM「JAPIC OTC医薬品CD-ROM 2010年7月版」

《特長》

- ◇国内流通のほぼ全ての一般用医薬品(一部の医薬部外品含む)、約12,000製品の添付文書記載情報〔2010年6月までの情報〕を収録し、検索・表示・印刷・テキストデータ出力が可能
〔Windows対応CD-ROM〕
- ◇7月版より製品単位でのメモ登録が可能に。また、検索項目に「小児に使える医薬品」を追加
- ◇JANコードによる製品直接表示機能
- ◇インターネット経由で“iyakuSearch”掲載の最新一般用医薬品添付文書PDFを表示
- ◇取扱い製品登録機能及び第一類医薬品の販売に必要な情報提供文書の出力機能

《価格》

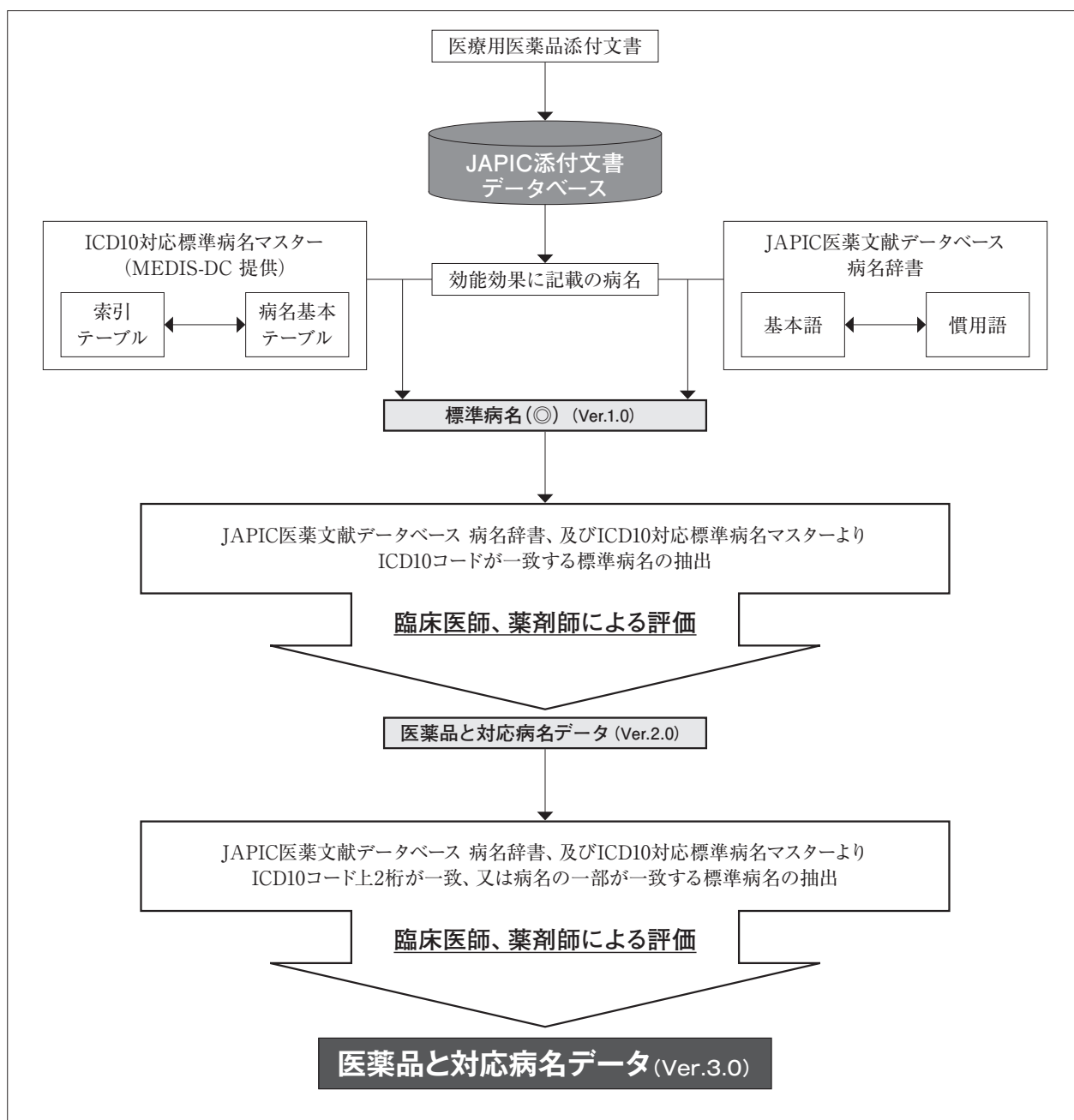
- ◇単品で¥3,150(税込)。年間セット4枚(7月・10月・1月・4月)で¥10,500(税込)

❖ JAPICサービスの紹介 ❖

■ 医薬品と対応病名

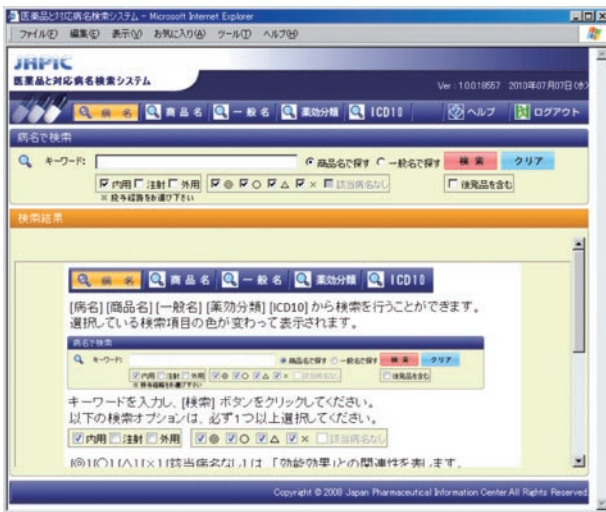
JAPICでは、医療用医薬品添付文書の効能効果に対応する標準病名の関連付けを行ったデータを基に、「医薬品と対応病名データ」、「医薬品と対応病名検索システム“病名ナビ”」、「添付文書記載病名集」、「効能効果の対応標準病名」の提供を行っております。今回、「医薬品と対応病名データ」の作成手順、及び「医薬品と対応病名検索システム“病名ナビ”」、「添付文書記載病名集」を中心にご紹介します。

◆ 「医薬品と対応病名データ」作成手順



◆「医薬品と対応病名検索システム“病名ナビ”」

「医薬品と対応病名データ」を、オーダーリングシステムや電子カルテシステムを介さずに、電子的に手軽に見られるようにJAPICで開発したものが「医薬品と対応病名検索システム“病名ナビ”」です。インターネット経由でご利用いただく「Web版」と院内ネットワークでご利用いただく「LAN版」の2種類の提供があります。



医療用医薬品 約2,000成分、約14,000品目（漢方製剤を除く）の効能効果に対応するICD10対応標準病名を関連付けています。データは毎月更新です。また、ICD10対応標準病名マスターの更新にも対応しています。

〈検索画面〉

- ①病名、商品名、一般名、薬効分類、ICD10から検索が可能です。
- ②内用、注射、外用の分類による検索が可能です。
- ③後発品も含めた検索が可能です。
- ④標準病名は同義・慣用語からも検索可能です。

〈検索結果〉

- ①検索結果は商品単位で表示されるため、商品単位での確認が可能です。
- ②標準病名に対する専門の医師、薬剤師の評価による妥当性を「◎」、「○」、「△」、「×」でランク付けしてあるため、処方薬に対応する標準病名の選択の際、参考となります。
- ③商品名、一般名、会社名の他、規格単位、薬価、レセプト電算コードなどの情報を網羅しています。
- ④添付文書のPDFとのリンクもあるため、添付文書情報がすぐに確認できます。



◆「添付文書記載病名集—医薬品の効能効果と標準病名—」

「医薬品と対応病名データ」を、冊子体でみられるようにまとめたものが「添付文書記載病名集—医薬品の効能効果と対応標準病名—」です。効能効果と対応する標準病名を一覧として見られるようにまとめている点が特長です。さらに用法用量、禁忌などの重要事項を加えています。また、厚生労働省保険局医療課長通知「医薬品の適応外使用に係る保険診療上の取扱いについて」（保医発第0921001号）による内容も掲載しています。冊子体のため、紙面の都合上、成分ごとに代表品にまとめた掲載となっておりますが、インターネット等を利用できる環境にない場合など、手軽にご利用いただける1冊となっております。

■お問合せ先：事務局 業務・渉外担当 (TEL：0120-181-276)

■「JAPIC AERSサービス説明会」を終えて

7月8日(木) 東京渋谷の長井記念館1階会議室にて「JAPIC AERSサービス」(以下本サービス)の説明会を開催いたしました。本サービスは、米国FDAのAERSデータを基に製薬企業等の安全対策業務や開発医薬品における有害事象傾向の把握に資することを目的にJAPICが開発したもので、①整備されたデータそのもののご提供、②データを利用したシグナル検出結果のご提供の二通りのサービスがあります。

当日は、「医薬品における安全性シグナルとその検出」、「AERSの概要」、「JAPIC AERSサービスのご紹介」、「JAPIC AERSの活用事例」などを中心に、スライドを使って説明を行いました。

続いて、特別講演として、「JAPIC AERSデータの試用体験」ということで、キッセイ薬品工業(株)医薬情報部国際PMSセンター長永尾豊氏から、実際にJAPIC AERSを利用した感想についてお話をいただきました。AERSは自分でダウンロードして使うことはできるがダウンロードに時間がかかるし、毎回のクリーニングが大変であるが、JAPIC AERSを利用すればこのような作業も省略できること、また、両者のデータを使用したシグナル検出では、ほぼ同じような結果であったことなどがご紹介され、JAPIC AERSは企業の医薬品安全対策などの業務に有用であるのではないかという報告がありました。

出席者は約70名で、会場はほぼ満席の状態でした。説



会場風景

明会終了後の懇親会においても熱心なご質問をいただき、また意見交換を行い、出席者の本サービスに対する関心の高さがうかがえました。

おかげさまで、本サービスにつきましては、医薬品の開発から安全対策業務の新たなツールとして関心をお持ちの製薬企業から多くのお問合せをいただいております。

JAPIC AERSサービスにご関心がおありの方は、どのようなご質問ご相談でも結構です。お電話又はメールにてお気軽にお問合せください。(T.H)

E-mail: japic-aers@japic.or.jp

TEL: 03-5466-1837 (開発企画担当)

■「第134回薬事研究会」を開催しました

第134回薬事研究会を6月10日(木) 科学技術館サイエンスホールで開催しました。

はじめに、「欧米における治療リスク管理の現状—FDA REMS、PMRおよびEUのRMP—を中心として」について日本製薬工業協会医薬品評価委員会PMS部会の古閑 晃氏、続いて「医療機関における安全対策、安全性情報伝達」について虎の門病院薬剤部長の林 昌洋氏、最後に「医薬品製造販売業の許可更新について—更新調査のGQP、GVP適合性調査の結果」について東京都健康安全研究センター広域監視部薬事監視指導課の小菅孝恵氏の講演がありました。

日本において本年4月に薬害肝炎事件の検証・再発防止のための行政のあり方検討委員会の最終提言がなされ、新たなリスク管理手法の導入等が提案されています。欧米における治療リスク管理の現状では、近年の安全性

に対する種々の批判から米国FDA再生法成立に至った経緯とREMS、PMRについて、EUにおけるリスク管理計画を中心に、世界および日本の動きを説明していただきました。米国PMRは目的・方法が明確にされており、EUのリスク管理計画は安全性監視計画とリスク最小化計画の2つのパートから構成されています。

医療機関における安全対策、安全性情報伝達では、医療現場に必要な医薬品情報とは最適の臨床判断を行うために必要な医薬品に関する事実、知識であること、医薬品を構成する要素は医薬品の“物”としての品質と医薬品の“情報”の品質であることを強調され、チーム医療の推進による安全対策、安全性情報の院内活用状況、アドバンスDIの実際、海外措置情報を基点とした迅速な対応と院内措置実施時の問題点、安全性情報活用のポイントなどを説明していただきました。

平成14年度に薬事法が改正され、17年度に製造販売制度が施行されました。医薬品製造販売業の許可更新では、東京都の更新調査の流れと、更新調査におけるGQP、GVP適合性調査の結果について説明していただきました。GQPでは品質標準書の未作成、規定すべき内容の欠落、承認事項、現状との内容のずれなど、GVPでは安全管理情報の収集先が不十分、記録の保存がない、安全確保措置の実施において実施手順の不足など、指摘事例を挙げての説明がありました。

今回は290名と多くの参加者があり、安全対策への関心の高さがうかがえました。(K.A)



サイエンスホール会場

「理事会」「評議員会」の概要報告

5月17日(月)に平成22年度第1回理事会、19日(水)に平成22年度第1回評議員会が開催されました。議題と主な内容は以下のとおりであり、すべて原案どおり承認・議決されました。

今回の主な議題でありました、平成21年度事業報告・決算報告においては、事業及び決算ともに概ね順調に推移していることをご報告させていただきました。平成21年度事業報告書・決算報告書は、先般会員の皆様へお届けいたしました。

◎平成22年度第1回理事会(通算第115回)

5月17日(月) 15:00~16:05、当センター3階会議室

【議題】

1. 維持会員の異動承認について
2. 平成21年度事業報告の承認について
3. 平成21年度決算報告の承認について
4. 評議員の選任について
5. 役付理事及び常勤役員の選任について

◎平成22年度第1回評議員会(通算第28回)

5月19日(水) 15:00~16:45、当センター3階会議室

【議題】

1. 理事の選任について
2. 平成21年度事業報告の承認について
3. 平成21年度決算報告の承認について

■理事・評議員の異動

《理事》

退任 竹嶋 康弘(前 社団法人日本医師会 副会長)
庄田 隆(前 日本製薬工業協会 会長)
〈以上 5月19日付〉

新任 中川 俊男(社団法人日本医師会 副会長)
長谷川 閑史(日本製薬工業協会 会長)
後藤 邦子(第一三共株式会社 部長)
〈以上 5月20日付〉

《評議員》

退任 稲田 勉
(前 旭化成ファーマ株式会社代表取締役社長)
〈以上 5月17日付〉

新任 浅野 敏雄
(旭化成ファーマ株式会社代表取締役社長)
〈以上 5月18日付〉

■役付理事及び常勤役員

《非常勤》

会 長 首藤 紘一(東京大学名誉教授)
副会長 中川 俊男(社団法人日本医師会 副会長)
土屋 文人(社団法人日本薬剤師会 副会長)
長谷川 閑史(日本製薬工業協会 会長)

《常 勤》

理事長 村上 貴久
理 事 持田 秀男
秋野 けい子
後藤 邦子

(※敬称略)

薬剤師の現場

臨床の現場以外の 薬剤師として私が出来ること

(社)兵庫県薬剤師会 薬事情報センター
薬剤師 藪下 圭子 (Yabushita Keiko)



■ はじめに

今年で(社)兵庫県薬剤師会は120周年を迎えますが、私が所属する薬事情報センターは、常任の薬剤師が私を含めて2名、業務時間は平日の月曜日～金曜日の8:45～17:30で、土日および祝日、年末年始、創立記念日(11月2日)は休館日とさせていただいております。

■ 業務内容

薬事情報センターの主な業務内容は次のとおりです。

1. 医薬品等に関する相談受付
2. 蔵書管理(書籍・一般誌・専門誌・その他)
3. 新聞管理(一般紙・専門紙)
4. 日本薬剤師会および他県薬剤師会、その他の関連団体・企業発行誌の管理
5. 各メーカー添付文書および添付文書改訂のお知らせ、インタビューフォーム等の管理
6. アンチ・ドーピング相談
7. その他

その他の業務としては、日本薬剤師会学術大会や近畿・大阪ブロック情報センター情報交換会、医薬品情報活動委員会(兵庫県病診DI委員会)等の出席、ホームページやFAX通信サービスの管理、兵庫県薬剤師会会誌「兵薬界」原稿執筆、また医薬品PL相談などを行っております。

この中から「1. 医薬品等に関する相談受付」「6. アンチ・ドーピング相談」の業務について具体的にお話しさせていただきます。

■ 医薬品等に関する相談受付

平成21年度における医薬品等に関する相談受付ですが、相談総件数が1,727件、項目数が2,307件で、ここ10年間の平均としてはそれぞれ2,034件、2,669件です。相談方法は、電話によるものが大半を占めておりまして86%、次いでFAX、直接訪問、E-mailとなっております。

相談対象者は一般消費者が最多で、平成21年度における一般消費者の占める割合は全体の64%、次いで薬局薬剤師や病院薬剤師、製薬会社および卸勤務薬剤師などとなっております。一般消費者の男女比ですが、男:女=22:78と圧倒的に女性からが多く、電話による相談で要した時間は平均11～12分、中には1時間を超えることもあり、私が経験した中で4時間ということもありました。

相談者のうち一般消費者からの相談が占める割合は年々増加傾向にあります。これは一概には言えないかも知れませんが、今まではクローズだった医療の世界が、近年はカルテや診療報酬・調剤報酬等のレセプトの開示、薬剤情報提供、更には製薬メーカーのホームページも今では大半のサイトがID/PW不要で閲覧が可能になっているように、オープンの方に向かってきていることが理由の一つではないかと推測します。知らなければ疑問が湧き上がることも少ないでしょうが、例えば「もらった薬の説明書を見ると数多くの副作用があるようだが大丈夫か?」とか「出された薬のことを調べると妊娠中は避けるようにと書かれてある。妊娠中と伝えたにも関わらず何故?」といったように、深く知ることにより数々の疑問や心配事が出てきても不思議ではありません。セルフメディケーションが必要とされてきた時代背景も相まって、個人の健康や医療に関する意識が高くなってきたとも言えるのではないのでしょうか。

また、医療機関や薬局で疑問に感じたことをその場で投げかけ、答えを得ているのにも関わらず、改めて当センターに問い直す方も多くいらっしゃいます。中には愚痴を聞いて欲しいのか話し相手が欲しいのか、問題が解決しても長々と話される方もいらっしゃいますが、そういった方を除く大半が「本当に飲んで大丈夫か?」「本当に今の症状に合った薬なのか?」等々、「本当に」という言葉が使われています。そこには「もっと深く聞きたかったけれど医師や薬剤師が忙しそうにされていて聞け

なかった」「何度も念押しをして確認したいけど、何度も同じことを繰り返し聞くのは失礼に感じる」など、悲しいことですが医師-患者、薬剤師-患者の距離が近いからこそ現れる気持ちが隠れているように感じます。“顔が見えない薬剤師”と言われて久しく経ちますが、このような方の相談を受けるたびに、電話などといったツールを使って相談出来る薬剤師、即ち全く別の意味で“顔が見えないからこそ相談出来る薬剤師”というのものもあるのかも知れない…、と思うこともしばしばです。

■ アンチ・ドーピング相談

2003年の静岡国体から初めてドーピング検査が実施されるようになり、同年より静岡県薬剤師会の大石順子先生のご尽力により、薬剤師（薬剤師会）がドーピング防止活動に本格的に取り組むようになりました。そして、その3年後の2006年、兵庫県で「のじぎく国体」が開催されました。この年、薬事情報センターが受け付けた相談総件数は158件、項目数は452品目にのぼりました。以降現在に至るまで、頻度こそ落ち着いてはおりますが、コンスタントに相談が寄せられております。

相談を受けるに際して大切なことは、選手の方が使用する医薬品について薬の専門家である薬剤師の立場からチェックすることにあります。中には回答出来ないような相談もございます。例えば、いわゆる健康食品。サプリメントとも呼ばれますが、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）の審査を経て禁止物として抵触しない「JADA認定商品」を除く商品に関しては回答出来ません。出来ないというよりむしろ、答えがないと言った方が相応しいでしょう。これらはあくまで食品であって医薬品ではないので、製造や販売の規制が厳しくなく、また表示成分が信頼出来るものばかりとも限りません。海外の製品であれば尚更のことで、中には実際に表示されていない禁止物質が混入されている商品もあるほどです。

こういった場合は、相談対象の商品がドーピング違反の対象となるのか、ならないのかの判断をするのではなく、「健康食品はドーピングという概念の中では完全にグレーゾーンに属している。よくわからないものは避けるに越したことはない。どうしてもその商品の効能を必要とする場合は、ドーピングに関して精通している医療従事者に相談し、それ相応の医薬品を採択してもらう方が安全である。それが選手自身を守ることである。」とお話ししております。まさに「君子危うきに近寄らず」といったところでは。

医薬品を筆頭に、そこに悪意の全くない“うっかりドーピング”であったとしても「知らなかった」はとおりません。きっと大丈夫だろうと闇雲に医薬品や健康食品を使用する選手は少ないでしょうが、選手をドーピングから守るのは医療従事者だけではありません。選手自身もそうです。日頃からドーピングについて選手本人にもしっかりと意識づけしてもらうようお話しするのも薬剤師として出来ることの一つだと思います。

また、2009年、JADAでは日本薬剤師会の協力のもと、ドーピング防止活動に従事する薬剤師の認定制度を創設致しました。所定の課程を修めた後、JADAより認定された薬剤師を「公認スポーツファーマシスト」と呼び、「最新のドーピング防止規制に関する正確な情報・知識を持ち、競技者を含めたスポーツ愛好家などに対し、薬の正しい使い方の指導、薬に関する健康教育などの普及・啓発を行い、スポーツにおけるドーピングを防止することを主な活動とする。」と定義づけされております。

私もこの「公認スポーツファーマシスト」の認定を受けました。また、同年度より「公認スポーツファーマシスト推進委員」に委嘱され、新たにスポーツファーマシストを目指されている先生方が受けられる基礎講習と実務講習のうち、実務講習にて、毎年更新される禁止薬物リストの改訂ポイントを中心としたお話をさせていただいております。

余談になりますが、最近では選手自身や関係者の方から「〇〇という薬が出されましたが、これはドーピング違反になりますか？」という相談以外に「風邪を引いたのですが、どのお薬だとドーピング違反になりませんか？」「花粉症の症状を何とかしたいのですが使えるお薬を教えてください。」など、最初の相談相手に薬剤師を選ぶといった問い合わせが増えて参りました。これぞまさしく薬剤師が出来るドーピング防止活動！

■ 最後に

私が薬事情報センターに勤務するようになって15年経ちましたが、医学も薬学も、また薬剤師も薬剤師会もどんどん進歩しています。当センター薬剤師として臨床の現場で活躍されている先生方の力に少しでもなれるよう、また一般消費者の方が抱く疑問や不安を出来るだけ解決・解消出来るよう、今後も日々勉強です。

会員の声

感謝をこめて

日本ケミファ株式会社 安全管理部長 兼 くすり相談室長
千葉 昌人 (Chiba Masato)



今日の医薬品営業活動の中心を担うのはMRであるが、プロパーと呼ばれた時期を含め、我が国の医薬品学術宣伝の歴史は今年で百年目を迎えるという。個人商店的なレベルではなく、あくまで製薬企業らしく本格的な学術宣伝活動が始まったという歴史であるが、明治44年頃から紆余曲折があって現在があるのであろうし、今後ますます訪問規制が強化されたらMRによるDI活動や企業からの情報発信はいったいどうなるのだろうか。

小職は、昭和57年に社会人となり、香川県高松市に住民票を置いたり、都内某所の健康食品・化粧品会社や某医科大学の門前保険調剤薬局に出向したりして今日に至っているが、その間MR支援部隊である学術部門や安全性管理統括部門に在籍の際、JAPICから入手した情報を有効性・安全性の面で活用してきた。それらの中で、現在最も身近で活用頻度の高いのはJAPIC Daily Mailである。

その他、製薬企業として入手している膨大な量の情報から、つたない経験で嗅ぎわかる「嗅覚に支えられた情報」を中堅製薬企業なりに、医療現場に役立つ情報として加工して提供しているつもりである。また、企業発信型の情報にならなくとも、収集した情報を分析・評価することこそが、医療機関の先生方や患者さんからの問い合わせに対し、正確・迅速・丁寧な対応ができるようになる「頭の体操（地頭の訓練）」に欠かせないものと信じている。故に、卒業した大学よりも入社してからの自助努力を重視し、部下のくすり相談対応者にもGVP/GPSP担当者にも「嗅覚」を大切に磨くよう指導しているところである。しかし、言うに易しく行うは難しなのがこの手の伝授であり、とかくマニュアル志向にならざるを得ない。小職、学生時代に有機溶媒を吸いすぎて、実際には鼻が利かないので困ってしまう。

さて、小職が約30年前に入社した我が社も、おかげ様で本年「創立60周年」を迎え社名ロゴを変更した。人間

で言う「還暦」を節目に、新薬開発も手掛けながら、ジェネリック医薬品や高尿酸血症領域に傾注して、二兎も三兎も追う意気込みである。どの分野もこれから競争が益々激化する中で、小職は安全管理部長（安全管理責任者）並びにくすり相談室長を兼任している。その業務内容は紹介せずともご理解いただけよう。これは企業規模が故にそうなっているのと、部下に恵まれているから出来ることであり、また両分野の業界団体活動を通じて知り合えた同業他社の仲間の支えがあったのである。殊に業界団体活動の仲間は、大学の同窓生と同じく、小職自慢の人的ネットワークであり、日々のアフター6(?)は芸能人並みとあってよい。今までの経験や境遇、部下、仲間、同窓生には勿論のこと、自分の鉄肝と良き理解者(妻*写真)にこの場を借りて感謝したい。

過日(本年5/22)、東京某所で大学の恩師の退職記念パーティを企画・運営した。恩師は72歳になるまで母校(城西大学:箱根駅伝でちょっと有名)の教壇に、実験室にさっそうと現れる現役志向型の先生。複素環天然物の全合成を生涯のテーマとする先生のもとセスキテルペン(炭素15個)の全合成が小職の修論だった。炭素と酸素と水素の構造式では複素環とは言わない。だが、先生は努力を認め仲人も引き受けてくれた。小職はパーティの総合司会を務めながら、先生の背中に若干の寂しさを感じつつも集まった同窓生や欠席でも祝電や花束をくれた卒業生を思い、「梵天丸もかくありたい」と思った次第である。

黒人初の大リーガー、ジャッキー・ロビンソンは「不可能の反対語は可能ではない。挑戦である。」と言ったそうだ。直接聞いたわけではないが、人種差別の激しい時代、大リーグで活躍する以前に大リーガーになることすら不可能に近かったはずである。今後の製薬企業からの情報発信も、色々な意味で努力と誠実さに裏打ちされた「挑戦」でありたい。



納豆—医薬品のようなサプリメントのような伝統食—

(財)日本医薬情報センター 添付文書情報担当 小林 映美 (Kobayashi Emi)

独特の味、におい、食感で苦手な方も少なくないと思いますが、私はそんな納豆をこよなく愛しています。JAPIC入社面接試験を受けたときも、納豆好きをやたらアピールしていた記憶があります。(それが採用の決め手になったかは分かりませんが…)

今回は納豆について、文字数の許す限り書き尽くしたいと思います。納豆が好きな方もそうでない方にとっても、少しでも納豆の魅力が伝われば幸いです。

■起源

茹でた大豆を俵に包み、馬につんで移動したところ、出先でそれを食べてみたら結構いける!というのが納豆の始まりといわれています。納豆の合成のメカニズムは、稲わらに生息する菌(納豆菌)により、大豆の発酵が行われる事にあります。稲わらでできた俵、そして程よい馬の体温・湿度が、大豆の発酵にちょうど良い環境をもたらしてくれたということです。

大豆自体にも栄養素は多く含まれていますが、発酵されることによりその栄養価はぐっと上がります。

■血液サラサラ効果

「ナットウキナーゼ」という名前は近年耳にされることもあると思います。これは納豆菌により産生される酵素で、すぐれた血栓溶解作用を持っているのが特徴です。

その効果は、病院で使用される代表的な血栓溶解剤「ウロキナーゼ」に匹敵し、納豆1パック(約100g)で、ウロキナーゼ20万IU(心筋梗塞で倒れた危険な状態の患者に投与する通常単位)に相当するといわれます。ちなみに、この量のウロキナーゼは金額にして約20万円。それに対し、納豆は1パック100円もしません。また、ウロキナーゼは点滴注射を受けている4~20分ほどの効果ですが、ナットウキナーゼは4~8時間も効果が持続します。

納豆は経口で手軽に摂取でき、しかも低コストで血液サラサラ効果が得られる、すぐれた食品といえるでしょう。

ちなみに、血栓を溶解する食品として知られているのは、現在のところ納豆だけです。

■腸内環境を整える効果

納豆菌は、熱や酸に強く、食べた後も強酸性である胃酸に負けずに腸内に到達します。そして、その発酵作用により腸内を酸性化し、善玉菌が棲みやすく、悪玉菌が棲みにくい環境を整えてくれます。

また、納豆には、納豆菌や善玉菌の働きを高める食物繊維も豊富に含まれており、さらなる整腸作用が期待できます。

■骨を丈夫にする効果

ビタミンK₂には、骨の形成を高め、骨からカルシウムが出て行くのを抑える働きがあります。納豆は、そんなビタミンK₂を、数ある食品の中でも群を抜いて豊富に含んでいます。また、骨の主成分であるカルシウムも含まれており、骨粗しょう症の予防に効果的といえます。

■おすすめの食べ方

•食べごろ

買ってから1~2日以内が一番おいしいようですが、納豆菌が十分繁殖した、5~7日目あたりに食べるのがおすすめです。

•粒の大きさ

大粒より小粒、小粒より極小粒、更に引き割りタイプがより効果的といえます。これは、大豆の表面積が大きいほどより納豆菌が繁殖しやすく、栄養素もアップするためです。

•よく混ぜる

混ぜることで、ネバネバに含まれるタンパク質が分解され、うまみ成分であるグルタミン酸が増加します。つまり、よく混ぜることでおいしさが増すのです。美食家としても知られる芸術家・北大路魯山人は、400回以上も混ぜていたといわれています。

•加熱しない

ナットウキナーゼは熱に弱い酵素であるため、できるだけ加熱は避ける(約70℃以下)のがおすすめです。温かいご飯と一緒に食べるのも美味しいのですが、私は人肌に冷めるまで接触させないようにしています。

•ビタミンCと一緒に

様々な栄養素が含まれている納豆ですが、ビタミンCの含有量が少ない食品です。納豆の薬味としてよく用いられる青ネギは、ビタミンCを豊富に含むため、とても相性のいい食品といえます。

参考資料

- 1) 納豆は効く 解明された納豆パワーの秘密:須見 洋行 著, 2010
- 2) 全国納豆協同組合連合会 納豆PRセンター
<http://www.710.or.jp/index.html>

外国政府等の医薬品・医療機器等の 安全性に関する規制措置情報より – (抜粋)

2010年6月1日～6月30日分のJAPIC WEEKLY NEWS (No.257-261)の記事から抜粋

■米FDA

- FDA Drug Safety Communication: 長時間作用型βアゴニスト (LABAs) と呼ばれる長時間作用型吸入喘息治療薬の適正使用に関する勧告を含むラベルの更新
<<http://www.fda.gov/Drugs/DrugSafety/PostmarketDrugSafetyInformationforPatientsandProviders/ucm213836.htm>>
- FDA Patient Safety News Video Broadcasts: 一時的心ペースングに関する問題の回避
<<http://www.accessdata.fda.gov/scripts/cdrh/cfdocs/psn/transcript.cfm?show=99#8>>
- HospiraブランドのLiposynおよびPropofol: 回収について
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/SafetyAlertsforHumanMedicalProducts/ucm215033.htm>>
- 歯科用アマルガムの評価のための米FDA諮問委員会
<<http://www.fda.gov/NewsEvents/Newsroom/PressAnnouncements/ucm215061.htm>>
- Benicar (olmesartan) と心血管系イベントに関する安全性レビューが進行中
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/SafetyAlertsforHumanMedicalProducts/ucm215249.htm>>
- インターネットで販売されているニセのTamiflu製品について
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/SafetyAlertsforHumanMedicalProducts/ucm216183.htm>>
- HIV-1 MONITOR Test, v1.5の緊急回収
<<http://www.fda.gov/BiologicsBloodVaccines/SafetyAvailability/Recalls/ucm216265.htm>>
- Mylotarg (gemtuzumab ozogamicin): 米国市場から撤退
<<http://www.fda.gov/Safety/MedWatch/SafetyInformation/SafetyAlertsforHumanMedicalProducts/ucm216458.htm>>

■米CDC

- Preliminary Results: 2009インフルエンザA (H1N1) 1価ワクチン接種後のギランバレー症候群に関する調査、米国、2009～2010年
<<http://www.cdc.gov/mmwr/preview/mmwrhtml/mm59e0602a1.htm>>

■Health Canada

- Pfizer Canada Inc.のCHAMPIX (varenicline tartrate): Canadian Product Monographの改訂
<http://www.hc-sc.gc.ca/dhp-mps/alt_formats/pdf/medeff/advisories-avis/prof/2010/champix_2_hpc-cps-eng.pdf>
- Bayer Inc.のMIRENA (levonorgestrel放出子宮内避妊システム): 子宮穿孔リスクの可能性
<http://www.hc-sc.gc.ca/dhp-mps/alt_formats/pdf/medeff/advisories-avis/prof/2010/mirena_hpc-cps-eng.pdf>

■EU・EMA

- European Medicines Agency・CHMPの6月会合(2010年6月21日～24日開催)の記者発表: Inviraseのベネフィット・リスクに関するレビューの開始など
<<http://www.ema.europa.eu/pdfs/human/press/pr/27209310en.pdf>>

■独BfArM

- Valproinsäure (valproic acid) / Valproate: Carbapenemen (carbapenems) との相互作用について
<http://www.bfarm.de/clin_094/DE/Pharmakovigilanz/stufenplanverf/Liste/stp-valproin.html>

■豪TGA

- 豪TGAに報告されたH1N1ワクチンPanvaxによる有害反応の疑い、2009年9月30日～2010年4月30日(更新)
<<http://www.tga.gov.au/alerts/medicines/h1n1vaccine1.htm>>
- 若年小児における季節性インフルエンザワクチン接種後の熱性痙攣に関する調査の中間結果および勧告、2010年6月1日
<<http://www.health.gov.au/internet/main/publishing.nsf/Content/Departmental+Media+Releases-1>>
- ヒトパピローマウイルスワクチンGARDASILに関する豪TGAからのアドバイス(2010年6月24日更新)
<<http://www.tga.gov.au/alerts/medicines/gardasil.htm>>

■ニュージーランドMedsafe

- Prescriber Update (Vol.31 No.2) 2010年6月号: dextropropoxyphene含有医薬品(Paradex, Capadex)の市場からの撤退など
<<http://www.medsafe.govt.nz/profs/PUArticles/PDF/Prescriber%20Update%20June%202010.pdf>>
- 12才未満の小児に対する複数の鎮咳・感冒薬販売の制限
<<http://www.medsafe.govt.nz/hot/media/2010/CoughandColdJune2010.asp>>

■医薬品医療機器総合機構

- コデインリン酸塩水和物及びジヒドロコデインリン酸塩等を含有する一般用医薬品の鎮咳去痰薬(内用)の販売に係る留意事項について
<<http://www.info.pmda.go.jp/iyaku/file/h220601-001.pdf>>

JAPIC事業部門 医薬文献情報(海外)担当

記事詳細およびその他の記事については、JAPIC Daily Mail(有料)もしくはJAPIC WEEKLY NEWS(無料)のサービスをご利用ください(JAPICホームページのサービス紹介:<<http://www.japic.or.jp/service/>>参照)。JAPIC WEEKLY NEWSサービス提供を御希望の医療機関・大学の方は、事務局業務・渉外担当(TEL 0120-181-276)までご連絡ください。

【新着資料案内 平成22年5月28日～平成22年7月7日受け入れ】

図書館で受け入れた書籍をご紹介します。この情報は附属図書館の蔵書検索 (<http://www.libblabo.jp/japic/home32.stm>) の図書新着案内でもご覧頂けます。これらの書籍をご購入される場合は、直接出版社へお問い合わせください。閲覧をご希望の場合は、JAPIC附属図書館 (TEL 03-5466-1827) までお越し下さい。

〈 配列は書名のアルファベット順 〉

書名	著者名	出版社名	出版年月
がん疼痛の薬物療法に関するガイドライン2010年版	日本緩和医療学会 緩和医療ガイドライン作成委員会 編	金原出版	2010年6月
原発不明がん診療ガイドライン 2010年版	日本臨床腫瘍学会 編	メディカルレビュー社	2010年5月
重篤副作用疾患別対応マニュアル 第4集	日本医薬情報センター	日本医薬情報センター	2010年6月
解説改正著作権法	寺本振透、西村あさひ法律事務所 他編	弘文堂	2010年5月
苦痛緩和のための鎮静に関するガイドライン2010年版	日本緩和医療学会 緩和医療ガイドライン作成委員会 編	金原出版	2010年6月
MIMS New Ethicals JYL-DEC 2010 Issue13	Elizabeth Donohoo et al	UBM Medica(NZ)Ltd.	2010年
ペインクリニック治療指針 改訂第3版	日本ペインクリニック学会ペインクリニック治療指針検討委員会 編	日本ペインクリニック学会	2010年7月
Simposium Therapeutico 2010 Enciclopedia de Especialidades farmaceuticas	Industria Farmaceutica et al	UBM Medica Portugal	2010年
特定保険医療材料及びその材料価格 材料価格基準早見表 平成22年4月		じほう	2010年4月
ViDAL 2010		CMP Medica	2010年
薬事法規・制度・倫理解説 2010-11年版	薬事衛生研究会 編	薬事日報社	2010年4月
薬事法薬剤師法関係法令集 平成22年版		薬務公報社	2010年6月

情報提供一覧

【平成22年7月1日～7月31日提供】

出版物がお手許に届いていない場合、宛先変更の場合は当センター事務局 業務・渉外担当 (TEL 03-5466-1812) までお知らせ下さい。

情報提供一覧	発行日等	JAPIC作成の医薬品情報データベース	発行日等
〈出版物・CD-ROM等〉		〈iyakuSearch〉 Free	http://database.japic.or.jp/
1. [JAPIC Pharma Report—海外医薬情報]	7月2日	1. 医薬文献情報	月 1 回
2. [Regulations View Web版] No.194—195	7月16日・30日	2. 学会演題情報	月 1 回
3. [添付文書入手一覧] 2010年7月分 (HP定期更新情報掲載)	7月30日	3. 医療用医薬品添付文書情報	月 2 回
4. [JAPIC NEWS] No.316 8月号	7月30日	4. 一般用医薬品添付文書情報	月 1 回
5. CD-ROM [JAPIC医療用・一般用医薬品集インストール版] 2010	7月30日	5. 臨床試験情報	随 時
6. CD-ROM [JAPIC OTC医薬品CD-ROM] 2010年7月版	7月30日	6. 日本の新薬	随 時
7. [JAPIC医療用医薬品集2011] 「薬剤識別コード一覧2011」	7月30日	7. 学会開催情報	月 2 回
〈医薬品安全性情報・感染症情報・速報サービス等〉 (FAX、郵送、電子メール等で提供)		8. 医薬品類似名称検索	随 時
1. [JAPIC Pharma Report海外医薬情報速報] No.740—744 (旧: 医薬関連情報速報FAXサービス)	毎 週	9. 効能効果の対応標準病名	月 1 回
2. [医薬文献・学会情報速報サービス (JAPIC-Qサービス)]	毎 週	〈iyakuSearchPlus〉	http://database.japic.or.jp/nw/index
3. [JAPIC-Q Plusサービス]	毎月第一水曜日	1. 医薬文献情報プラス	月 1 回
4. [外国政府等の医薬品・医療用具の安全性に関する措置情報サービス (JAPIC Daily Mail)] No.2223—2243	毎 日	2. 学会演題情報プラス	月 1 回
5. JAPIC Weekly News No.260—264	毎週木曜日	3. JAPIC Daily Mail DB	毎 日
6. [感染症情報 (JAPIC Daily Mail Plus)] No.348—351	毎週月曜日	4. Regulations View DB (要:ID/PW)	月 2 回
7. [PubMed代行検索サービス]	毎月第一・三水曜日	外部機関から提供しているJAPICデータベース	
		〈JIP e-infoStreamから提供〉	https://e-infostream.com/
		〈JST JDream II から提供〉	http://pr.jst.go.jp/jdream2/

医療用医薬品集2011 〈検索用CD-ROM付〉



■本書の特長

- ◆35年の編集実績による信頼と使いやすさ
- ◆国内流通全医薬品の最新情報に基づき作成
- ◆検索用CD-ROM(非インストール版)付
- ◆便利な「薬剤識別コード一覧」
(冊子。別売2,940円 税込)の無料請求書付
- ◆類似薬選定のための「薬効別薬剤分類表」を掲載
- ◆更新情報メールの無料提供(要登録)
- ◆シールタイプの更新情報サービス(有料)

■検索用(非インストール版)CD-ROM Windows版とは

- ◆収録内容
 - 医療用医薬品集
 - 一般用医薬品集
 - 薬剤識別コード一覧
 - 医療用医薬品の最新添付文書画像(PDF)の表示機能付(無料・要インターネット接続。PDFは月2回更新)
- 薬価情報
- 後発品の全情報

定価: 8,000円(税込)

(※インストール版は15,000円(税込)で別途販売しております。)

13,650円(税込)

B5判 / 約3,300頁

財団法人 日本医薬情報センター (JAPIC) 編集・発行 TEL 0120-181-276
丸善 出版事業部 発売 TEL 03-3272-0521

上記書籍の他、電子カルテやオーダリングシステムに搭載可能なJAPIC添付文書関連データベース(添付文書データ及び病名データ)の販売も行っております。データの購入希望もしくはお問い合わせはJAPIC (TEL 0120-181-276) まで。

Garden

ガーデン

このコーナーは薬用植物や身近な植物についてのヒトクチメモです。リフレッシュにどうぞ!!

なたまめ

学名は、*Canavalia gladiata*。秋になると30cmくらいの豆果をつけ、その形は、鉞(なた)と言うより刀のように、やや反り返っている。英名はSword bean。熱帯アジア原産で、江戸時代初期に中国から渡来。関東以西に広く分布、栽培されている。福神漬けの材料のひとつ。熟した莢も豆も有毒。含有成分としては、たんぱく質のConcanavalin A、BやCanavalin。未熟種子には、植物ホルモンのジベレリン類(カナバリアジベレリン)が含まれている。(hy)



JAPICホームページより
<http://www.japic.or.jp/>

HOME

サービスの紹介

ガーデン

Topページ右下部の「アイコン」からも閲覧できます。